

## JFC ネットワーク・スタディツアー2016

2016年8月5日(金)～10日(水)まで5泊6日でスタディツアーを開催しました。今年の参加者は9名で、マニラ・ダバオコースとも参加されました。

### ◆スケジュール◆

- 8月5日(金) PM マニラ集合、国内線でダバオへ移動
- 8月6日(土) AM RGS-COW(※)事務所訪問、JFC母子とのワークショップ  
PM 家事労働者養成学校訪問  
ホームステイ先へ移動、夕食、ホームステイ
- 8月7日(日) AM ホームステイ先で過ごし、昼食  
PM 家庭訪問
- 8月8日(月) AM 国内線でマニラへ移動  
PM マリガヤハウスのオリエンテーション参加  
(渋滞のため到着が遅くなり参加できず)  
JFCとの交流会/DVD「隣る人」上映
- 8月9日(火) AM 家事労働者支援 NGO 訪問  
PM ランパラハウス(※) 訪問
- 8月10日(水) AM マニラで解散

(※)RGS-COW(Religious of the Good Shepherd-Center for Overseas) COWはフィリピン人移住労働者の帰国サポートや安易な海外就労に対する啓発活動、人身売買防止活動などを行う団体。JFCネットワークは2007年からCOWで相談を受けたケースも扱っている。

(※)LamparaHouse: JFCの母親たちの自助グループ。民芸品などを作り日本で販売している。

### 参加者たちからの感想をご紹介します♪

#### ◆最も印象に残っているプログラム&その理由

##### ★感想

◆ホームステイ：受入れ家族のみなさんにとってもよくしてもらえ、家庭での暮らしがわかって、知識として持っていた情報にリアリティが持てたり、今までの見方を修正したりできた。

★「ホームステイ先のホストに聞いていけないことはない、むしろ聞いてほしい」とのことだったが、実際にその場に行ったら躊躇してしまい、あまり聞けなかった。子ども2人のうち1人はJFCでもう1人は父親が違う(調停期間中にフィリピンでできた子?) のでもう1人のほうも聞いていいのか迷うとか、またJFCのお母さんの母親がたまたま身の回りの世話に来ているときで、親子3代のだんらん空間におじゃましているという状況で根掘り葉掘り質問はしにくいとか、あるいはもし話を聞いて自分が受け止められるのか不安だったのかもしれないこととか、いろいろ理由はある。生身の人・家庭に向かい合うのを意識した。あまり聞けなかったけれど、日本でエンターテイナーしていた頃を懐かしんでいたりと、JFCの父親との思い出

がある美しいビーチに連れて行ってくれたりしたこと、JFCの父親との過去は否定したいものでは必ずしもなく、人生の重要な一部なのだと思われたところもあった。現在の家が予想以上に立派だったというような経済的根拠が関連するのかもしれないが、とにかく、出会った人、話した人との間で持てた小さなリアリティの数々が、今回のツアー参加の一番の手ごたえです。  
(橋本みゆきさん/大学非常勤講師)

◆最終日NGO (Sprints of Home Scalabrini Incorporation) 訪問：POEAと斡旋業者との関係性、海外出稼ぎの仕組み、被害者が経験した労働搾取などを学ぶことができ、大変有意義な時間となりました。どうしてフィリピン人女性達がリスクを負ってまで海外出稼ぎに行くのかが明確になりました。

★今回のスタディーツアーでは大変有意義な時間を過ごさせて頂きました。まず個人レベルではホームステイや家庭訪問でJFC母子たちと交流を通し、彼らの置かれている状況やどんな暮らしをしているのかを垣間見ることが出来ました。いくつかの家庭を訪れたことで貧困にも格差があることを学びました。そして社会的、経済的レベルでは現地のNGOの活動を通じて、POEAと斡旋業者との関係性や海外出稼ぎの仕組みなど学ぶことが出来ました。マイクロとマクロな両方の視点から問題提起することでフィリピン社会の現実を学ぶことが出来ました。さらにスタディーツアー参加者の皆さんは様々なバックグラウンドを持ち、弁護士、行政書士、研究者としての立場から見解を伺うことができ、大変視野が広がりました。最後にJFC母子たちをはじめとするフィリピン人の方々のホスピタリティー精神に感銘を受けました。と同時にそんなホスピタリティー精神が日本で商品化されてしまう状況にも心を痛めました。今後、研究者として彼らの置かれている状況が向上するためには自分に何が貢献できるのかを問う旅となりました。  
(ドティー 川人由佳さん/学生)

◆ホームステイ：フィリピンでの庶民の生活を垣間見ることができ、かつ、個人的にいろいろ家族から話を聞くことができたから。今回私は、比較的恵まれた生活環境の家にステイさせていただき、お母さんに加えて、JFCを含むお父さんが全員違う子どもたち3人と、いろんな話をすることができました。これまでのこと、今の生活、これからのこと、今はまっていること...などです。そこで、感じたのは、彼らは「かわいそうなだけの人たち」じゃないこと。彼らは強く、たくましい。精一杯毎日を生きていて、その時その時で、ベストじゃないけれど、よりベターな選択肢を選んで生きている。そして、あつけらんかんとしている。「支援してあげたい」なんていう、自分のおごり、上から目線を感じ、恥ずかしく、情けなく思いました。今後、この 이슈にずっと携わっていきたくて思っていますが、そんな目線を忘れずにお付き合いしていけたらと思います。

★ツアーの内容も濃く、参加者もとても熱心でいい方ばかりで、とても充実した6日間でした。いろんな方々が参加されていたので、1つの事象を、自分とは違った目線で眺められている方々のコメントを聞きながら考えることができ、非常に有意義な時間となりました。その中でも、1番考えたこと。今回、「なぜ、つらい思いをしてまでも、何度も出稼ぎに行かなければならないんだろう？」というところの根本的な疑問。これに対して、完答ではありませんが、いくつかの答え(答えの断片?)を見つけることができました。

本当は彼らだって、フィリピンで家族と一緒に暮らしたい。でも、ここには仕事がないから、条件が悪くても、出稼ぎに出ざるを得ない。自分や家族が生きるためには選択肢がほかがない。これぞ、「貧困」だ。そして、出稼ぎに出るために大きな借金をして、1度

目の出稼ぎではそれを返さなきゃいけないから手取りが少なく、回数を重ねるたびに得られる額が大きくなる……。まだまだ、私の知らない理由、気づいてない理由があるでしょうが、様々な要素が複雑に絡み合っ、解決が単純でない大きな問題であることを、実感できたことが大きかったです。(昔、途上国の貧困問題に取り組む国際協力NGOで働いていたのに、すっかりぼけてしまっていますね。)

だからこそ、多様な経験・知識・スキルを持った人がより多く、問題解決のための活動に加わることが大事だと思いました。現地で産業を興すことも大事、きちんとした出稼ぎのしくみをつくるもことも大事、出稼ぎに出た人の人権を守ることも大事、声を上げること/政策提言も大事…。いろんな役割が必要で、ひとりじゃ解決できません。

そんな中で、私の役目はなんだろう……。これが、ツアー中に次に考えた大きなテーマです。私は、行政書士です。日本で暮らす外国人のビザ手続きに従事しながら、日本国内の多文化共生推進、外国人の定住化問題に取り組むことをライフワークにしたいと思っています。よって、フィリピンで産業を興すことには尽力できませんが、日本側で何かできるはずです。今の仕事から鑑みると、人材会社や地域の中小企業と関わる人が多いので、やむを得ず日本に出稼ぎをしなければならなくなった方々に、きちんとした仕事、きちんとした生活が送れるようなしくみづくりに貢献できれば……。と思います。

ツアー中、小豆沢先生が「“白い”フィリピンパブを経営しようかしら (笑)」と冗談でおっしゃっていましたが、私の場合は具体的には、業務上連携している人材会社さんとともに“白い”人材会社を作りたいです。日本で暮らすフィリピン人女性たち (主にJFCのママたち) が、夜の仕事から昼の仕事へ転職し、日本語や日本のビジネスマナーを学びながら、徐々にキャリアアップしていけるような、そんなスキームを作り上げ、彼女たちのエンパワメントに貢献したい。そんな野望を持っています。名古屋のアバンセさんみたいな人材会社の関東版、できるといいです！実はツアーに参加する前からこれについては動き始めていたことでしたが、現地で「やっぱり、これ、必要！」と実感することができたので、自信を持って、自分の任務を果たしたいな、と思います。何か形になってきたら、お世話になったJFCネットワークの方々、現地の方々、今回のツアー参加者の方々にも、報告したいところです。

今回1点、残念だったのは、マリガヤハウスで説明がきけなかったこと。そして、待機してしてくれたJFCやJFCママたちと十分に話せなかったこと。壁面に貼ってあったポスターについて、詳しく説明が聞きたかったです。長時間待っていてくれて、しかも話したそうにしていたJFCやママたちが自由に話ができない状況だったのは、ちょっとさみしかったです。

(笠間由美子さん/行政書士)

◆ホームステイ：JFCの置かれている現状や背景が日々の生活・空気・肌身を通じて感じ取ることができるからです。書籍・資料など読むと経済格差・男女差別・女性に対する暴力など決まり文句を目にするけれども、それが実際にどういうことなのか、どうしてそのような問題が生まれるのか、どうすれば解決できるのか、現場を見るのと書類だけを見るのとでは全く異なるように思います。スタッフの方々、ホストファミリーの皆さまに、このような貴重な機会を与えていただき、感謝しています。

★私は日本の公設事務所 (東京パブリック) の外国人部門で弁護士をしているので、日本に住むフィリピン人の方から日本人夫との離婚 (DVや虐待含む)、子供の認知、国籍取得、在留資格、労働問題などの相談・事件依頼を受けます。ちょうど、スタディツアーの案内をいた

だいたいは、日本人の父親とフィリピン人の母親との間の子供に関する事案を担当していて、JFCを巡る様々な問題の背景事情やフィリピンで生活しているJFCの生活を見てみたいと思っていたところでした。また、前年に同僚らが参加してとてもよかった、と言っていたこともあり、ぜひ、参加したいと思いました。

COWダバオ事務所、JFCのみなさんとのワークショップ、ホームステイ、家事労働者養成学校、マリガヤハウスの訪問とJFCクライアントとお話し、人身売買の被害者のシェルターなど訪問先のすべての方々にとっても温かく歓迎していただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。様々な困難ななかで生活しながらも、それぞれが助け合っている姿、COWのシスターやマリガヤハウスの尚子さんの献身的な活動に触れ、私自身がエネルギーをいただきました。

私が最も印象に残っているのは、ホームステイです。JFCのお母さんは、日本にフィリピンパブでホステス（やダンサー？）就労に来ていて、そこで知り合ったお客さんである日本人男性との間にJFCを出産している方々が多いと思います。パブでの仕事も、本来就労ができない「短期滞在」ビザのもとでの違法就労で、労働条件も過酷でそれ自身が人身取引と言える事案も多いと思います。JFCの父親である、日本人男性は結婚どころが、認知すら拒否する、結婚しても、酷い暴力を受け、離婚せざるを得ず、シングルマザーとして生活しているなど、当初からあまり幸福な結果が見えないなかで短期滞在を繰り返して、日本にやってきます。子供は無国籍であったり、日・比いずれかの国で生活しているけれども、常居地国の国籍を持っていないためオーバーステイ状態であったり、子供のアイデンティティを大きく左右する問題も抱えています。私は、どうしてそこまでのリスクを冒してまで日本に来て、しかも男性に奉仕し喜びを与えるという職業に就くことを希望するのかな、と思っていました。ホームステイを通じて、その疑問に対する回答が実感として理解できたように思います。

ホームステイ先はダバオ市から車で2時間ほどの海岸沿岸部の小さな町でした。1階建ての小さな小屋に家族5人（女性ばかり）が川の字になって就寝し、トイレにはトイレットペーパーがなく、桶で水を汲んで、自己洗浄する、台所の水回りと風呂場は一緒（区別なく）、お湯がでないので水浴びという家庭でした。町は、バラック小屋がひしめき、狭い道は土が丸出しの未舗装、そこで近所の子供たちがみんなで遊び、各家庭に上下水道が完備されていないので、共同の水くみ場で早朝から女性らが洗濯をするという、戦後の日本の下町を彷彿とさせる貧しい地域でした。仕事と言えば、主に女性が切り盛りしている「サリサリストア」という雑貨屋さん、男性は漁師や運転手が多いようでしたが、働き盛りの若い男性が朝からバスケットをしたり、道でブラブラしており、仕事がないことは明らかでした。そうした時に、経済大国・日本で働くということは、違法就労・暴力・ピンハネのリスクがあっても、「夢」のような話なのだそうです。

ホームステイ先のお母さんは、20代の時に、短期滞在で日本に入国し、フィリピンパブで働いていました。接客中に気分が悪くなり「もう（お酒が）飲めません」と言うと、客から顔を殴られたり、体を触られたり、椅子の上で中指を立てる客に「ここにすわれ」と言われたり、屈辱的な経験をしていましたが、パブのオーナーは助けてくれることはなかったそうです。それでも彼女は、日本人は優しい、特に「パパ」（JFCの父親）は、優しくかったと言っており、とても複雑な思いがしました。またリクルーターという日本の歌舞伎町でいうところのキャッチの男性が、

3か月だけ日本で働かない？と声をかけてくるのは、当たり前な状況なのだそうです（実際、ホームステイ先のご家族の一人(20代)も声をかけられており、実際に日本に行こうか真剣に迷

っていました)。国内に仕事がない、だから多少のリスクを冒しても、人身売買かもしれないけれど、海外で就労するしかない、というプッシュの要因はとても理解できます。フィリピンの1日当たりの最低賃金は、日本の1時間当たりの最低賃金に相当し、平均月収は2万円程度だそうなので、経済格差は歴然としています。そうすると月に5, 6万円は母国・フィリピンの送金できるであろう日本での就労は、特に仕事のない貧困地域に住む人には魅力的にうつるは止むを得ないのだと思います。

日本は、海外から単純労働は受け入れない、移民政策はとらない建前を取っていますが、すでに様々な形で海外から単純労働者を受け入れています。私はそれ自体は、「必要悪」な側面もあると思っています。しかし問題は、人身取引（労働搾取・性的搾取・児童労働など）など最も人権侵害に遭いやすい外国人労働者に、実際に被害があった場合の救済手段が不十分な点にあることだと思います。母国語で提供できる法的サービス・労働法や社会福祉に関する基本的知識・情報提供（学習会の開催など）、裁判になった場合の就労ビザの付与や衣食住の保障など、外国人労働者へのリーガルアクセスや権利意識をより充実する制度が必要のように思います。また、フィリピンと日本の弁護士、NGOや学者の連携も必須のように思います。今回のツアーを通じて、たくさんの人との出会いがありました。ツアーに参加されたメンバーもそれぞれ異なる職業・バックグラウンドをお持ちの方々でしたが、国際的な人身取引被害やジェンダーの問題について共通の問題意識を持っていて、とても勉強になりました。またいつか皆さまと一緒に共通の問題意識を実際の活動に結び付けることができたらと思っています。

(板倉由美さん/弁護士)

◆ホームステイ：実際にJFCの家族がフィリピンでどのような生活をされているのかが実際に寝食を共にすることで多く感じる事ができた。

★印象に残ったことではないのですが、残念だったのは、マリガヤハウスでのオリエンテーションが全く聞けなかったこと。飛行機が遅延したので仕方がないと思うが、DVDを見るよりも、どんな流れでJFCの支援が行われているかを知りたかった。我々の到着までずっと待っていてくれたJFCやお母さんたちにもう少し焦点を当てた時間を過ごしたかった。全般的に非常にタイトなスケジュールではあったが、非常に有意義なツアーを経験させていただき、ありがとうございました。

(築山祐子さん/行政書士)

◆ホームステイと家庭訪問：フィリピンに住む、けっして裕福ではない人々の日常を経験できたことが一番印象に残りました。ホームステイ以外のお母さんたちも来て歓迎して下さったことが嬉しかったです。JFCのお母さんから日本への出稼ぎの話や日本人の父親に対する思いなどを初対面の自分に話してもらえたり、たくさんの写真をみせてくださって思い出話を聞かせてもらえたことは貴重な機会だったと思います。JFCのこどもやお母さんの苦しい生活状況を知り、子どもを一生懸命に愛し育て、子どもの未来を案じているお母さんたちの話をきいて、「日本国籍取得」や「日本へ行くこと」がJFCのこどもたちやお母さんたちにとって、現状を打開する最後の切り札のようなものであるということを実感しました。また、もう関係は切れてしまっているにも関わらず、まだ幼いJFCのこどもたちがいつ「日本人の父親」に電話するのか、いつ会いに来るの・行けるのかとお母さんに聞くので返事に困っているという話を聞いたときは、とても切なかったです。私たちが「人身取引に遭うかもしれないから安易に来日しない方がよい」として来日を思いとどまらせることは、JFCのこどもやお

母さん、家族にとってあまり意味がない、むしろ傲慢な見方ではないか、しかし彼女たちがそのような被害に遭わない保障はどこにもない、そのためには何が必要なのか…と…悶々と考えています。

★日本に帰国する時、空港の搭乗ゲートで日本旅券をもった裕福そうなフィリピン女性とその子どもという親子や、フィリピン女性と日本人男性、こどもという家族を何組も見ました。私がスタディーツアーで出会ったJFCの親子と、空港で私が見かけた親子、いったい何が違っただろうかと今でも考えます。単に出会った日本人男性が「悪かった」だけの問題なのだろうか。私を含めた日本社会のJFC問題に対する「無知さ」も今回出会ったお母さんや子供たちの経済的にも精神的にもきつい生活や人身取引の被害にあってしまう状況を作り出しているのだと思います。このツアーに参加し、JFCのこどもやお母さんたちに出会ったことでJFC問題がより身近になりました。この経験無駄にしないために、ボランティアなど今後なんらかの形でこの問題に関わってゆきたいです。(大野聖良さん/日本学術振興会特別研究員 (PD))

◆プログラム：家庭訪問とホームステイとMALIGARAHOUSE：実際に暮らしている家と環境で浸食を共にし、泣き笑いを少しでも共有できたことがよかったし、また、MALIGAYAHOUSEでは児童養護施設のドキュメンタリー映画「隣人」を日本語版ながら、JFCと母たちと一緒に見られて、「あれは何?」「どうして泣いているの?」「一緒にかなしくなる」…など質問攻めにしてくれたJFCに感激しました。同じような年齢の日本の子どもの「暮らし」を見られ、似ているところ、違うところを感じたJFCと出逢わせてくれたプログラムでした。

★今年も、特にダバオのホームステイ先で、JFCと母親のいろいろな事情を、家族と暮らす家であれこれ話せたこと、少しの間でも暮らしを共有できたのが一番です。また、風邪をひいてふーふーいっている私にマッサージをしてぐっすり休ませてくれたので、翌日にはとてもよくなっていました。ありがとう！原初的といってもいい、人間を癒やす力を感じた旅でした。また、マニラでの家事労働者支援シェルターのNGOの実際に暮らしている家を訪ねて、話が聞けたことも得がたい経験でした。建前で被害者を救済するという国家と、いわば国家の本音では一人一人の被害者に手をさしのべはしないのだという現実を実感できました。話してくれた彼らと実際に出逢えたことに感謝しています。(稲塚由美子/ミステリー評論家)

◆ECMI訪問：事前に家事労働者養成学校などを訪問し、家事労働者を養成し送り出す流れを聞いていたので、その裏側の面を聞くことができた。業者を監督する制度が実際にはきちんと機能していないようで、被害者が救済されない状況が分かった。フィリピンは海外労働者によって国を維持しているのに、こんなずさんな制度でよいのか、と感じた。

なお、プログラムではないが、セブパシフィックの遅延も大変印象に残った。

★既に何度も行っているのにいろいろなことに慣れてしまっているが、やはり彼らの生活の貧しさ、厳しさには毎回ショックを受ける。今回のホームステイ先では空心菜を収穫し出荷していたが、山のように収穫しこれを切りそろえて縛って34人で半日かかって一束5ペソを100束くらい作る、これで6-7人の家族を養っている。確かに今の日本とは違った時間が流れていて、それはいいと思うが、経済面に限ってみれば、将来を考えるとということが難しいのだろうと思うし、だからこそ海外に働きたいと思うのだろうと感じた。

彼らに対し、何ができるのだろうか、と思うこと自体、何か筋違いな印象がぬぐえない。

(近藤博徳さん/弁護士/JFCネットワーク理事)